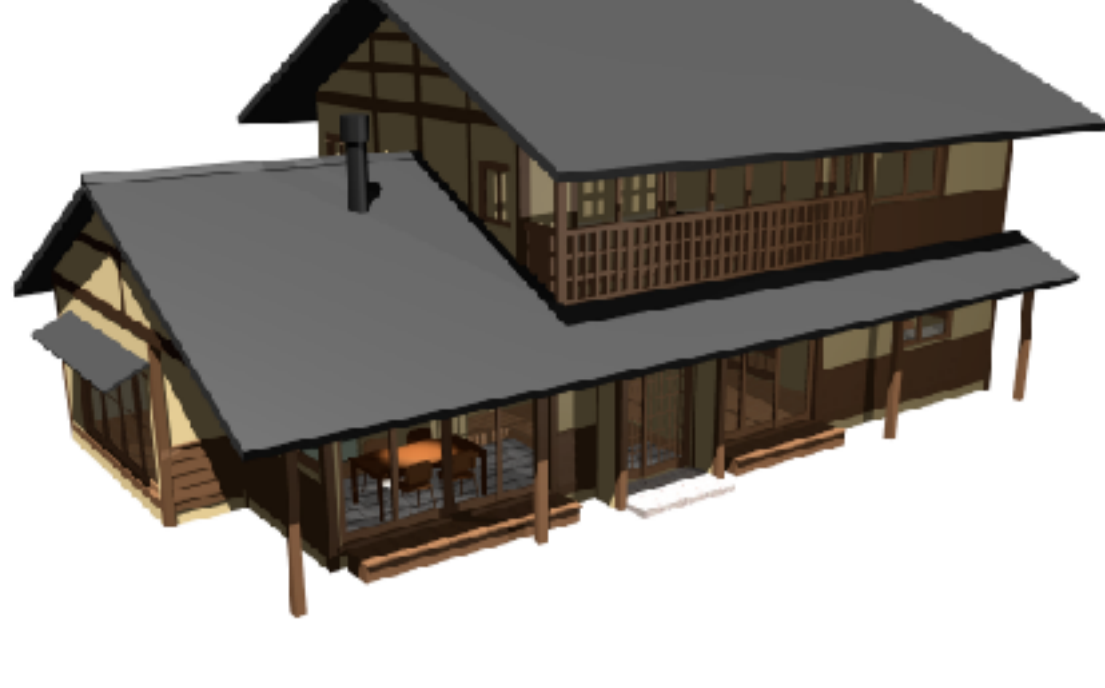


長谷川家新築計画



【立地条件と家族構成】

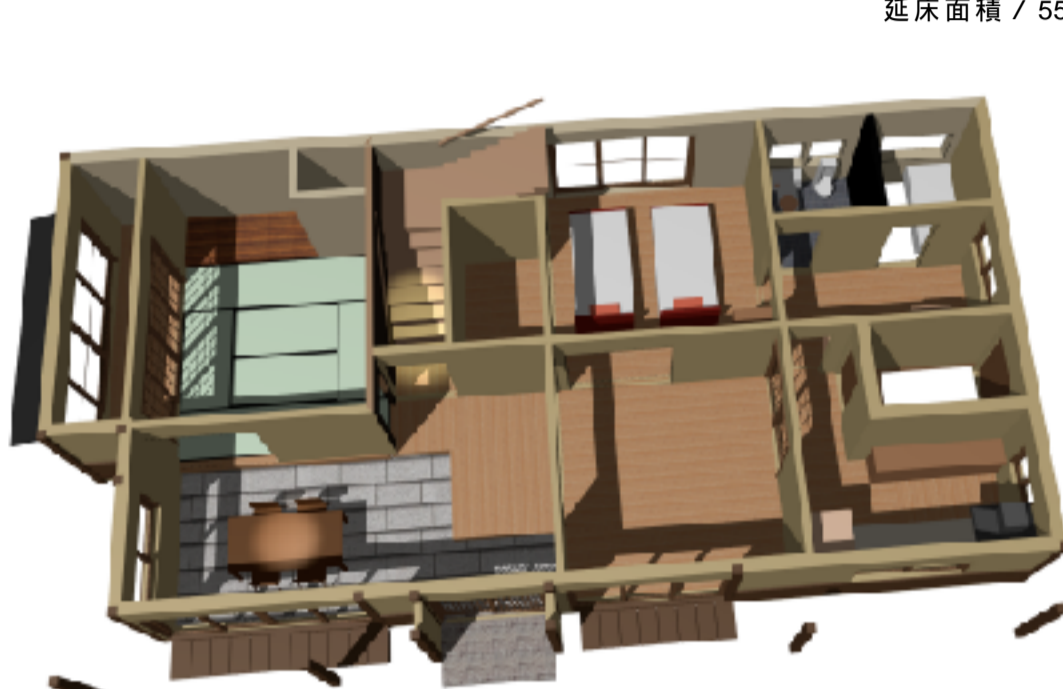
立地条件

比較的自然的多い住宅地。
敷地面積 120坪。東・南に6m幅の道路と田んぼが広がる。
西北が山。東北に家がつづく。
南風の吹く地形。

家族構成

老夫婦 + 40代前半の働き盛りの夫婦
(将来、子供が存在も計画に考案)
老夫婦の生活パターンを考案した設計。
40代全前半の夫婦の生活パターン・趣味等を考案した設計。
流行の先端を追うのではなく、本物の質や味わいにこだわっている。

1階床面積 / 32坪
2階床面積 / 23坪
延床面積 / 55坪



住み手自信が参加する家づくり

4年前新築のアパートでの新婚当時、喘息の持病を持つ妻が急に体調を悪くし、喘息はもちろんなアレルギーやアトピーが発症した。その原因が、住宅の建材や防虫、防腐剤に含まれる有害な科学物質であることがわかったのは言うまでもない。これらの科学物質は、合板や、ビニルクロス、ペンキなどの材料とも、それを接着する糊にも、また防腐、防虫、防カビ剤などにも含まれているといわれますから、新建材に頼りすぎた今の家のつくり方と、それを受け入れすぎたわれわれの生活は、反省を迫られているといえます。それではわれわれはどうしたらよいのか。

自然素材素材で家をつくる住み手の自覚

住宅は人が生まれ育ち、憩う生活の多くの時間を過ごすところですから、昔から慣れ親しんできた、木や漆喰や土壁といった安全な自然の素材でつくるのが理想的といえます。最近では木の家が欲しい、自然素材を使いたいという声を実に多く耳にします。しかし、自然素材というものは、均一で精度の高い工業製品とは異なり、一つひとつの材にくせがあり、木であれば多少の収縮をしたり狂ったりします。漆喰や土の塗り壁は、乱暴に扱えば傷が付きましますし、ていねいに塗る工程を重ねれば、ひび割れが生じたりもします。自然素材の欠点をカバーし、長所を生かすには、それなりの技術と手間と時間がかかるのです。新建材は危険だから今度は自然素材だといって飛びついても簡単に出来るものではないのです。つくり手にも、住み手にも新建材の家をつくるのとは違い、少々手ごわいのだという自覚が必要なのではないのでしょうか。

気持ちよく長くつきあえる住まい

住まいに求めたいのは、居心地の良さ。そして毎日暮らしていくうちにますます好きになる家をつくりたい。自然素材と職人の手によってつくられた家。地元の木を生かし、漆喰を塗り、風や空気も家をつくる要素とした、快適で健康な本来の日本の住まいを手に入れたい。

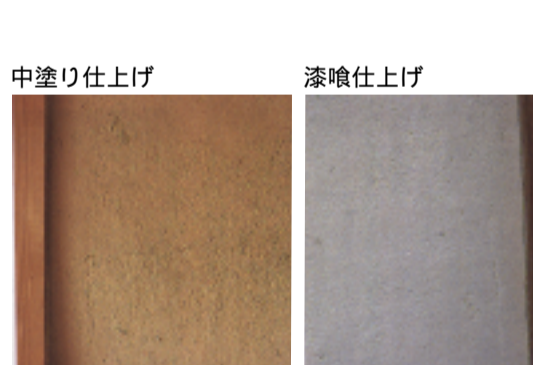
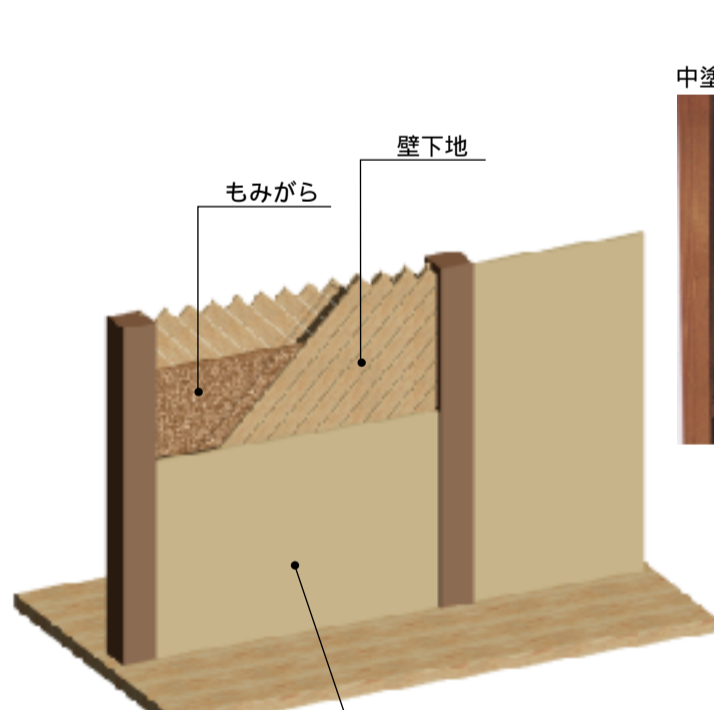
木組みの技術。

釘やボルトなどを使わない、伝統的な工法にこだわってみる。昔の建物は、木が全部表に出ていて呼吸できる状態に造られているため、日本の気候風土になじんでいた。だから100年も200年ももたはず。梁はみせるためだけじゃない。木を絶対に窒息させないことが大切だからです。



再生の土壁と、もみがらの断熱材。

池のような土置場をつくる。壊された古い民家の土壁を何年間か寝かせる。砂、すさ、ま土を混ぜてこしたものに糊を入れて中塗りをする。家内はこれで仕上げとする。コストダウンになり、風合いもある。さらに外壁は漆喰で仕上げ。断熱材にはもみがらを使用。断熱効果は非常にたかく、壁内の通気を確保し、壁内結露を防止する。もしもの火事での鎮火作用もあり、コストもかからない優れたもの。



大谷石の土間の魅力。

チルチンびと 1999/ 10号に登場したアーキテクトビルダーの住吉慶男氏の「大谷石の土間のある家」に注目。目の粗い大谷石は断熱性に大変優れている。木の相性もよく、見た目も権威的でないところが魅力と住吉氏。石なのに足の当たりがやさしくて、ストーブひとつで足の先からあったかい大谷石は富山の冬にもってこいなのでは...



チルチンびと 1999/ 10号より

朝鮮張りの美。

朝鮮張りは、短い板を使い切るには最適な方法です。みためも美しい朝鮮張りはとても経済的工法です。



チルチンびと 2000/ 11号より

はりつけ壁。

神楽坂建築塾第7回 講師中村昌平氏による[座学]でのはりつけ壁をつくってみる。襖と同様に組子に下貼りをする。ただし、襖戸以上の15~16層にもなる下貼りにするそうだが、今回16層のかわりにもみがらを入れ、2層の下貼りをしてみる。冬の暖房時、夏の冷房時に、それぞれの効率を高めて省エネルギーを図る断熱の役割割り期待できます。